



熊本に日本国際童謡館設立を計画中の歌手

おおば てるこ
大庭 照子さん

■プロフィール
本名 大塚明子
1938年 熊本市水前寺に生まれる
九州女学院高校からフェリス女学院
短期大学音楽科卒、二期会研究
科ポピュラー音楽に転向
1971年—スクールコンサート出演。以後全国
の小中学校、高校、養護学校を訪問
大庭音楽事務所発足
1975年 「第17回日本童謡賞特別賞」受賞
1987年 「第1回日本童謡賞」受賞
1988年 「第1回下総院一音楽賞（演奏部
門）」受賞
1989年—「アスペクタ童謡ピクニック」開催
* 著書に「めぐり逢った歌・人・こころ」(熊本
日日新聞社)

今から約二十年前、NHK「みんなのうた」で流れた「小さな木の実」。大庭照子さんの歌う、哀調を帯びた美しいビゼーのメロディーに、全国の子供たちと母親から反響が寄せられました。これをきっかけに童謡の世界に入ってしまったという大庭さん。現在、ふるさと熊本に「日本国際童謡館」設立の大きな夢を構想中です。

童謡は日本独自の文化です

童謡は今、日本独自の文化として外国からも評価されつつあります。と言うと、外国にもマザーグースとか民謡の中のわらべ歌があるはずだと思われませんか。ところが、日本の童謡は違いますよ。ところが、日本の童謡は大正時代、鈴木三重吉が提唱した「赤い鳥運動」で、「子供のための歌」という目的の下に創作された点で、大変珍しいんだそうです。

北原白秋、中山晋平、野口雨情、山田耕筰……。一流の作家たちの手になる数々の名曲は、日本人として誇れるものだと思います。しかも、それが民間の運動だったということですから。また、今日を考えてみても、音楽の

世界が多様化している中で、子供から大人まで幅広い世代が共有できるという事は貴重だと思います。

でも、私は最初からそんなことを知ってたわけじゃないんですよ(笑)。学生時代クラシックを学び、その後ポピュラーに転向したものの、なかなか芽が出ない。「小さな木の実」で注目されたお陰で、各地の小中学校で歌う仕事が増えて、それが高校まで含めたスクールコンサートの発展したんです。

多くの人たちの力で童謡運動を広げた

はじめは生活のために歌った童謡だったんですが、子供たちとの触れ合いの中で、次第に「これが私の歌だ」と思

美しい水、山、緑……。聞き手と歌手が感動を分かちあった瞬間を見たとき、熊本こそ童謡のふるさとだと思ったんです。



熊本盲学校の生徒もステージで共演



えるようになり、生徒や先生から手紙をいただくようになりました。ろう学校で耳の不自由な生徒さんが、私の唇の動きに合わせて声を出すのを見たときは、何とも言えない感動でした。ただ、「童謡を認められたい」と思っても、私だけでは力不足。ほかの歌手や多くの方たちの力がないと童謡運動は大きくできません。また運動は趣味ではないから、経済的な基盤も必要。そこで音楽事務所を構え、各種イベントを制作するようになりました。

童謡運動を巡ってはいろんな苦労とか、ときには誤解を受けることもありましたが、それも私には快感。いつか分かってもらえるって。すごく打たれ強い人間なんです(笑)。だから、日本童謡協会から「日本童謡賞特別賞」をいただいたときは、ほんとうに嬉しかったですね。

熊本こそ童謡のふるさと

童謡館の構想は、アスペクタの「童謡ピクニック」開催がきっかけです。阿蘇の大自然の前に、みんなが大きな声で歌う。子供は犬と一緒に走り回り、出演者と観客が向かい合ってお弁当を食べる……。そんな中で「ふるさと」が歌われ、聞き手と歌手が感動を分かち合う瞬間を見たとき、この環境がある熊本こそ「童謡のふるさと」なんだと、心から感じたんです。

よく県外の方から「大庭さんの故郷だから熊本に作るんですね。」と言われますが、それは、違います。実は、「モッコス、ワサモン、肥後の引き倒し」、これですよ(笑)。一見マイナスのようですが、それが許された背景には、豊かな環境と人の優しさがあつたからです。新しいもの好きで、照れ屋で人情のある県民性には、日本人の原点がある。だから、熊本に持ってきたいんです。全国の童謡運動を支援し、諸外国にも日本文化として情報発信できる——そんな童謡館にしたいと思っています。カタチになるまでには難しいことも多いけど、私はふるさとで打たれ強い人間として育つてますから(笑)、大丈夫なんです。

